



映画『Michael / マイケル』より。  
6月12日(金)より全国公開。  
配給：キノフィルムズ  
©, TM & ©2026 Lions Gate Entertainment Inc. All Rights Reserved.

# 映画『Michael / マイケル』がもたらす覚醒

## 高橋芳朗

(音楽ジャーナリスト)

なぜマイケル・ジャクソンは  
いま再び映画化されるのか。  
字幕監修を務めた高橋芳朗が、  
神話の奥に埋もれてきた“生身のマイケル”  
に静かに迫っていく。

クイーンズのボーカリスト、フレディ・マーキュリーの絶頂と苦悩を描いた映画『ボヘミアン・ラプソディ』が2018年に世界を席巻して以来、ポップミュージックの巨人たちの物語が次々とスクリーンに映し出されてきた。エルトン・ジョン、アレサ・フランクリン、エルヴィス・プレスリー、ホイットニー・ヒューストン、ボブ・ディラン、ブルース・スプリングステイン——それぞれの光と影が、映像という新たな回路を通じてふたたび世界中の観客の前に解き放たれた。だがそこには、一人だけ、どうし

ても避けて通れない名前があった。マイケル・ジャクソン。「キング・オブ・ポップ」の称号すら手狭に感じさせる、20世紀が生んだ最大の文化的アイコン。その男をめぐる映画『Michael / マイケル』がついにその幕を開ける。

### この映画には特別な重力がある

製作陣の顔ぶれからして、ただごとではない。プロデューサーを務めるのは、ほかならぬ『ボヘミアン・ラプソディ』を手がけたグレアム・キング。その実績と手腕を携えた彼のもとに、個性的な二人が集った。メガホンを取るのは、『トレイニング・デイ』や『イコライザー』シリーズでデンゼル・ワシントンと組み、社会の暗部と向き合う硬質な演出で知られるアントワーヌ・フークア。脚本を担当するのが、『007 スカイフォール』で「ジェームズ・ボンド」シリーズに新たな深みをもたらしたジョン・ローガンだ。人の闇を骨太に描くフークアの演出力と、複雑な人物の深層を言語化するローガンの

筆力——その組み合わせは、マイケル・ジャクソンという途方もない題材に挑むための、これ以上ない布陣と言えるだろう。

そしてこの映画の命運を最終的に握るのは、やはり主演の説得力だ。マイケル・ジャクソンを演じるのは、実兄ジャーマインの息子、すなわちマイケルの甥にあたるジャファア・ジャクソン。血縁という偶然を超え、彼はその姿、声、そしてダンスに至るまで、叔父の面影を圧倒的なリアリティで体現してみせる。映し出されたジャファアは、きつと奇妙な既視感と昂りを同時にもたらすだろう。これは単なる「似ている」という次元の話ではない。ジャクソン家の血と肉体が、マイケルという神話をもう一度この世界に召喚した。その事実だけで、『Michael / マイケル』はすでに特別な重力をもっている。ジャファアを支える俳優陣も盤石だ。父ジョセフ役を務めるコールマン・ドミンゴは、『シン・シン / SING SING』や『ビル・ストリートの恋人たち』で人間の業と尊厳を体当たりで演じてきた実力派。母キャサリン役のニア・ロンダ

は、『ボーイズン・ザ・フッド』以来、黒人コミュニティの女性像を誠実に紡ぎ続けてきたキャリアをもつ。マイケルの弁護士ジョン・ブランカ役のマイルズ・テラーは、『トップガン マーヴェリック』でその名を広く知らしめた。三者の厚みが重なるとき、ジャファアのマイケルはより豊かな存在感を得る。

映画が描くのは、マイケルの少年時代から「キング・オブ・ポップ」誕生までの軌跡だ。インディアナ州ゲーリーの製鉄所で働く父ジョセ

1988年の「BAD ワールドツアー」。マイケル・ジャクソンにとって初のソロコンサートツアー。ツアーは16カ月続き、15カ国をおとす400万人以上を魅了した。写真=Alamy Stock Photo/amanaimages



この続きは本誌でどうぞ！